

# 令和7年度「品川区学力定着度調査」の結果から 明らかになった課題と学力向上に向けた取組

## 「品川区学力定着度調査」の趣旨

- (1) 学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区の教育施策に生かす。
- (2) 各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。
- (3) 区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求める。

**1 調査日** 令和7年4月15日（火）

**2 調査対象** 品川区立学校 第2～9学年の全児童・生徒

### **3 調査内容**

教科に関する調査

→ 調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用の力を測る問題で構成

<第2・3学年> 国語、算数

<第4～5学年> 国語、社会、算数、理科

<第6学年> 国語、社会、算数、理科、英語

<第7～9学年> 国語、社会、数学、理科、英語

**品川区立伊藤小学校**

# 令和7年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組（国語）

## 1 国語の定着状況についての概要

5学年中4学年の校内平均正答率が目標値を上回っている。部分的な課題は以下に記す。

## 2 具体的な課題

- 第2学年…基礎の正答率は目標値をやや上回り、活用の正答率は目標値と同等程度の結果であった。「文章を書く」といった自分の考えを文章で書く問題については目標値を非常に大きく下回っており、課題である。
- 第3学年…校内平均正答率及び活用問題の正答率が目標値に対して大きく下回っている。「情報の扱い方に関する事項」、「文章を書く」のように、既知の情報を用いて選択肢を選んだり自分の考えを書き表したりする問題に課題がある。
- 第4学年…主語と述語との関係の理解を問う問題では正答率が目標値を大きく下回り、ローマ字で表記されたものを正しく読むことを問う問題では、正答率が目標値をやや下回る結果となった。言葉の特徴や使い方に関する事項に課題がある。
- 第5学年…ほとんどが目標値を超えている。「調べたことをもとに文章を書く」の正答率のみ、目標値と同等程度であった。
- 第6学年…領域別では「書くこと」、問題の内容別では「敬語について理解し、正しく使っているかを問う問題」及び「目的に応じて、報告する文章を書く問題」が、目標値を大きく下回る結果となった。

## 3 課題の原因として考えられること

- 第2学年…考えていることを文章にして記述することに課題があり、苦手意識もある。また、時間内に問題に取り組むことが難しかったという要因も考えられる。
- 第3学年…漢字の定着につながる学習が十分ではない。また、「書くこと」では設問に対する正対した答えを導き出す力や題意を捉える力が十分ではない。
- 第4学年…言葉の特徴や使い方に関する事項についての学習は、短い単元で扱われることが多いため、学習の定着のために十分な時間をかけられなかったことが考えられる。
- 第5学年…自分の考えとそれを支える事例との関係を明確にすることが苦手としていることや、ICT機器の活用頻度が増え、字を書く頻度が減ったことが課題と考えられる。
- 第6学年…「書くこと」については、自分の思いや考えを、接続語を適切に用いて100字程度で書き表す力が十分ではないと考えられる。敬語に関しては、会話で使えていても敬語そのものの種類や意味を理解していないことが要因として考えられる。

## 4 課題解決のための方策（取組指標）

課題解決のため、以下の方策を取っていく。

- 第2学年…学習の振り返りやワークシート等で、日常的に考えを短い文章で書く経験を積ませる。考えていることを言葉にするために語彙を増やす。
- 第3学年…漢字については反復学習を意識的に行い、家庭学習でも定着を図る。文章を書くことについては、日記に定期的に取り組ませ、文章表現に慣れさせていく。
- 第4学年…言葉の働きについての学習をする際は、授業で学んだ内容を、家庭学習や朝学習でも取り組み、学習内容の定着を図る。
- 第5学年…文章を読み捉える際に、自分の考えだけでなく、文章中からそれを支える事例との関係を明確にする活動を「書くこと」の分野で意識させる。
- 第6学年…「書くこと」においては、100字程度の短作文に週に1回の頻度で取り組ませ、書く力の向上を図る。敬語においては、朝学習の時間を活用して習熟を図ったり、日頃から敬語を使って会話をしたり文章を書いたりする場面を多く設定して敬語にふれる機会を増やしていく。

## 5 次年度の数値目標（成果指標）

どの学年も「書くこと」における課題が多かったため、校内研究の実践も踏まえて書く力が身に付くよう指導に当たっていく。領域別正答率で見た場合、全学年、全領域で校内平均正答率が目標値を上回っていないため、次年度は全ての領域で目標値を上回るようにする。

# 令和7年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組（社会）

## 1 社会の定着状況についての概要

各学年の校内平均正答率について、第4学年は全国平均及び区平均をおおむね上回った。第5学年は全国平均を非常に大きく上回り、区平均も上回った。第6学年は全国平均をやや上回ったが、区平均とは同等程度であった。

## 2 具体的な課題

第4学年…領域別正答率は概ね目標値を上回っている。問題の内容別では「工場の仕事」の観点においては、目標値を非常に大きく下回っている。

第5学年…領域別正答率は全て目標値を上回った。問題の内容別では「ごみのしよりと利用」における校内正答率と目標値との差が最も小さかった。

第6学年…領域別正答率は全て目標値を上回った。問題の内容別では目標値に対する正答率が「日本の農業」及び「日本の水産業」についてやや下回っている。

## 3 課題の原因として考えられること

第4学年…市の地図を読み取る力や、工場の仕事の工程について資料を読み取る力が十分ではないこと。

第5学年…言葉の定義や、正しい名称を覚えていない児童が一定数いるのと同時に、資料を読み取る力が十分ではないこと。

第6学年…米づくりの作業（代かき）などの名称の理解が十分ではない。日本の漁港と水揚げ量などの資料を比較する力、読み取る力が十分ではないこと。

## 4 課題解決のための方策（取組指標）

課題解決のため、以下の方策を取っていく。

第4学年…地図記号に慣れ親しむことができるよう、授業で地図帳を活用する。また、教科書等の資料を基に考えを述べる活動を取り入れる。

第5学年…資料の活用の仕方を改めて指導すると同時に、資料を読み取る学習活動を多く設定する。タブレットや小テストを用いて、言語のインプット・アウトプットを繰り返し行うことで知識の定着を図る。

第6学年…タブレットや小テストを用いて、今後も知識の定着を図る。また、資料を根拠に自分の考えを記述したり比較したりする学習を繰り返し行うことで、資料を読み取る力を身に付ける。

## 5 次年度の数値目標（成果指標）

観点別正答率でみた場合、知識・技能において、目標値を+5ポイント上回るようにする。その他の領域においては、引き続き、目標値を上回るようにする。

# 令和7年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組（算数）

## 1 算数の定着状況についての概要

ほとんどの学年において校内平均正答率が目標値を上回った。おおむね良好である。

## 2 具体的な課題

第2学年…領域別正答率では目標値が下回っている領域はないが、「3つのかずのけいさん」、「とけい」の設問に関しては、目標値をやや下回った。

第3学年…領域別正答率では、4領域中3領域で目標値を下回っている。設問ごとに見ると、「10000までの数・分数」に関して、目標値を大きく下回っている。

第4学年…どの設問も正答率が目標値を上回っているが、その中でも目標値との差が小さいのは「たし算・ひき算」である。

第5学年…全領域で正答率が全国平均よりも大きく上回り、区平均よりもおおむね上回った。「わり算・計算のきまり」の設問のみ、目標値をやや下回った。

第6学年…正答率は区平均よりやや下回ってはいるが、同等程度の結果となった。校内で目標値を下回った内容は「平均」、「割合」、「体積」の三つである。

## 3 課題の原因として考えられること

第2学年…問題で問われていることを的確に捉え、様々な文章に対応する力が十分ではないこと。時計に関しては、長針と短針を読み誤ることがあると考えられる。

第3学年…10000までの数の大小関係や、不等号の意味の理解が十分ではないと考えられる。また、問われていることを的確に捉え、筋道立てて考える力が十分ではない。

第4学年…計算後に確かめをする時間が十分でなかったり、繰り上がりや繰り下がりをおぼえてしまったりしていることが原因であると考えられる。

第5学年…様々な計算のきまりを、日常生活や既習の内容と関連付けてイメージ化して捉えることが十分ではないことが考えられる。

第6学年…資料に0が入っている場合の平均の求め方、複合立体の求積などの応用問題に課題があった。基本と応用を結び付けて考える力が十分でないことが考えられる。

## 4 課題解決のための方策（取組指標） 課題解決のため、以下の方策を取っていく。

第2学年…発展問題に取り組んだり問題作りをしたりして、数学的に考える力を養う。

第3学年…宿題等で4位数の表し方や大小比較の復習を行い、習熟を図る。また、日々の学習の中で、既習事項の復習を繰り返し行い、基礎的・基本的事項の定着を図る。

第4学年…日頃の計算学習で見直す時間を設定し、検算をするよう指導する。

第5学年…計算のきまりを式変形としてのみ捉えるのではなく、図と結び付けて考え、説明し合う中で、その式変形の具体的なイメージを豊かにする活動を十分に行う。

第6学年…日常生活と結び付けることで、普段から数学的に見方・考え方を働かせられるようにする。また、様々な解法を考え、共有する活動を行う。

## 5 次年度の数値目標（成果指標）

領域別正答率で見た場合、全学年、全領域で校内平均正答率が目標値を上回ってはいないため、次年度は全ての領域で目標値を上回るようにする。

# 令和7年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組（理科）

## 1 理科の定着状況についての概要

各学年の校内平均正答率について、第4学年は全国平均と同等程度であった。第5学年は全国平均及び区平均を大きく上回った。第6学年は全国平均及び区平均をおおむね上回る結果となった。

## 2 具体的な課題

第4学年…類型外回答が区平均より多く、問題で聞かれていることが理解できていない児童が多い。虫眼鏡の使い方、植物の花と実の順番、昆虫の脚の位置、影のできる向きといった1学期に学習した単元の正答率が2～3学期の単元に比べ低い。

第5学年…多くの問題の正答率は区平均を上回ったが、文章で回答する問題の未回答率が10%前後であった。理科における用語や名称を覚えていない児童が多い。

第6学年…正答率は区や全国を上回っているものの、理科における用語や名称を答える問題の未回答率が10%前後であった。また、顕微鏡の使い方と雲画像の見取りに関する問題の誤答が区平均を下回った。ふりがが一往復する時間を求める式について、授業と異なる式での求め方であったため、誤答が多かった。

## 3 課題の原因として考えられること

第4学年…問題文の読み取りに慣れておらず、問われたことに答えられていないと考えられる。また1学期単元の正答率が低く、知識が定着されていないと考えられる。

第5学年…星座早見の使い方など、授業内で実際に操作しなかった内容や、どのように調べるか教員から実験方法を提示した内容は正答率が低く、反対に体験した内容についてはよく理解できていると考えられる。

第6学年…言葉の定義や正しい名称を覚えていない児童が一定数おり、全体の1割が未回答となってしまう。器具の扱い方については授業中に友達に任せてしまい、一部の児童が理解しないままだったのではないかと考えられる。

## 4 課題解決のための方策（取組指標）

課題解決のため、以下の方策を取っていく。

第4～6学年…授業の中で問題解決学習のサイクルを繰り返し体験させる。予想や考察には根拠（理由）が必要であることを徹底して伝え、自然事象と理由を結び付けて覚えられるよう指導する。また単元終わりに復習の時間を設ける。

## 5 次年度の数値目標（成果指標）

○第4学年の正答率について、どの項目でも目標値を上回る。（来年度 第5学年）

○自由記述問題の未回答率を今年度同様5%未満にする。（来年度 第5・6学年）

# 令和7年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組（英語）第6学年

## 1 英語の定着状況についての概要

問題の正答率では、ほとんどの項目で目標値に対して同等又はおおむね良いと言える結果となった。全国正答率と校内正答率の対比においても、おおむね全国正答率を上回っている。JTEと担任との協力体制の下、レッスンプランを綿密に考え、表現活動に取り組めるよう指導を工夫してきたことが、「知識・技能」及び「思考・判断・表現」の結果につながったと考えられる。しかし、英作文（誕生日にしたいこと）に関しては、全国正答率に対し、ポイントがやや下回る結果となった。

## 2 具体的な課題

・英作文における「例文を参考にしながら、自分のことについて、簡単な語句や基本的な表現を用いて書いている。（誕生日にしたいこと）」においては、校内正答率が目標値をおおむね上回っているが、全国正答率と比較するとやや下回る結果になっている。

・「英作文」の設問4問は、他の問題と比べて無回答率が多い。

→英作文に関しては、昨年度の調査結果でも課題として上がっていた。この結果から、英作文における思考・判断・表現や単語の意味理解に課題があると考えた。

## 3 課題の原因として考えられること

(1) 基礎的な単語の定着や語彙の量が十分ではないこと。

(2) 一つの単元で学習したことを次以降の単元で十分に生かすことができていないこと。

## 4 課題解決のための方策（取組指標）

課題解決のため、以下の方策を取っていく。

(1) 今回の調査結果をJTEに共有し、児童一人一人が、英語への意欲や必要感をもって学習に取り組めるようレッスンプランを工夫し、学習環境を整える。

(2) 英語科の授業だけでなく、基本的な単語を日常生活の中で使えるよう繰り返し定着を図る。

(3) 単元で学習した単語を通年で活用していけるよう都度機会をつくり、意味理解への定着を図る。

## 5 次年度の数値目標（成果指標）

全ての問題において校内正答率が、目標値及び全国正答率を上回るようにするとともに、無回答率を低くする。